

編 集 後 記

秋たけなわの候、「臨床神経学」を愛読いただいている皆様には日常臨床などでお忙しい毎日を過ごされていることと存じます。私は本年1月より歴史ある peer review journal である「臨床神経学」の編集委員を担当しています。「臨床神経学」は私を含めて多くの脳神経内科医の知識向上に大いに貢献していると考えております。

これまで英語論文を含めて毎月数件の peer review journal 査読を行ってきましたが、編集者業務を担当してから査読を行う機会に論文内容をより深く吟味するようになったと感じています。査読の重要なポイントの1つは批判的に論文内容を評価すること、そしてもう1つは建設的な提案をすることです。批判的な視点では、新規知見を特に重要視しています。新しい病気や病態を発見することは極めて稀なことなので、多くの場合は症候や診断方法、臨床経過、臨床転帰、治療などの新規知見あるいはまだ注目されていないポイントが記載されていることを重要視しています。建設的な視点では、投稿規定に合っていること、不足している情報の追加を促すこと、冗長な内容に対して重複内容の整理を促すことを多く経験してきました。このような視点で査読されていることをご理解いただき論文を「臨床神経学」にご投稿いただくと、速やかな採択が期待できます。

私がレジデント時代（1999年）に論文作成のイロハを学びながら症例報告を「臨床神経学」に投稿したことは、

私にとって診療や研究の原点になっています。論文投稿の準備から論文採択までの全てのステップが勉強になり、自分の力や自信に繋がったと信じています。当時、自分ひとりでは気づくことができなかったこと（症例報告の詳細は割愛します）を、指導医の手ほどきのもとまだ注目されていなかった症候の詳細な観察と原因となった病気の画像診断を行い、図書館のMEDLINEで過去の参考文献を調べて、指導医の丁寧な指導のもと論文を執筆し、頭部画像フィルムをスキャンしてから図を作成し、印刷原稿を郵送で投稿したことを今でもはっきりと覚えています。約2ヶ月後に郵送で届いた審査結果の返事には批判的かつ建設的な査読者のコメントが記載されており、修正作業を通してさらに深く症例を考察することができました。現在は、研究・論文作成を行う際には、①電子カルテからの情報収集、②電子情報の画像検査からの作図、③PubMedを使用した文献検索、④電子投稿できる大変便利な時代になりました。しかし、「新規知見やまだ注目されていないポイントに気づくこと」と「推敲を繰り返して論文を作成すること」は私のレジデント時代と全く変わっていません。論文作成には時間と労力が必要ですが、必ず将来の力と自信に繋がります。多くの脳神経内科医（特に若い先生方）からの「臨床神経学」への投稿をお待ちしています。

（古賀 政利）

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 園生 雅弘 編集副委員長 高尾 昌樹
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡 古賀 政利
 鈴木 匡子 坪井 義夫 西野 一三 星野 晴彦
 編集委員（幹事兼任） 小野寺 理 新野 正明 三澤 園子

「臨床神経学」 第59巻 第10号 2019年10月1日発行
 編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
 発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 戸田 達史
 印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>